

今月は毎年節分の時期に幼稚園でお話している創作童話をひとつ。

昔々、鬼と人間は仲良く暮していました。毎年秋になると人間は鬼の住んでいる山の入り口に、畑や田んぼで取れた野菜やお米を大きなざる一杯に盛り上げ「お〜い、鬼たち！今年も地の宝物ができたぞ〜」と言って鬼たちにプレゼントしていました。数日たつと、今度は鬼たちが村の入り口に、野菜やお米の入っていた大きなざるの中に、木の実やきのこ、果物などを一杯に盛り上げ「お〜い村人達！今年も山の宝物ができたぞ〜」と言ってプレゼントしていました。これはいつから始まったのか誰も知りません。でも秋になって畑の仕事が終わると、必ず行われていました。ところがある年、たいへんなことが起こりました。その年は春から天気が悪く、雨が降り続き、逆に梅雨になると雨が降らず、夏にはとうとう水もなくなり、お米や野菜がほとんど取れなかったのです。村の人たちはたくさんできた豆だけを頼りに冬を乗り切らなければなりません。同じように山でも木の実や果物がほとんど取れません。でもその年も、少しだけですがプレゼントの交換をしました。「お〜い、鬼たち。今年は少しだけしかないが、我慢してくれ〜」。「村の人たち〜、山の宝物も今年は少ししか取れなんだ。少しでわるいな〜」とほんの気持ちだけを交換しました。そして冬がやってきました。いつもの年以上に厳しい寒さです。村の人たちは少ない米をおかゆにして食べていました。でもそのままでは次にお米のできる秋まで持ちません。そこで村の人たちは薄い薄い重湯にしてお米を食べ始めていました。他に食べられそうなものは何でも食べていました。山の鬼たちも同じでした。木の実やきのこ、そして食べられそうな木の根っこを集めてきて、たくさんのお水を入れて薄い薄いスープを毎日食べていました。そんな辛い冬のある日のことです、事件が起こりました。村の庄屋様の米蔵に誰かが入り込み、お米を盗んだのです。庄屋様の家の庭には大きな足跡が残っていました。それは山の鬼の足跡に違いありません。今まで仲良くしていたのに、どうしてこんなことをやったのだろうと、村の人たちは不思議がりました。でも泥棒は泥棒。庄屋様は村の人たちを集め、どうするかを話し合いました。そして「きっと又来るだろうから、村の入り口で待ち伏せして、その鬼を懲らしめよう」ということになりました。村の人たちは家に帰ると、鬼を懲らしめるための棒を用意しました。村にひとりの男の子が居ました。丁度、お父さんが庄屋様の家から戻ってきて、棒を用意しているのを見てしまいました。そしていつものように食べるために魚を釣りに出かけました。川の傍に、もう誰かが来て、釣り糸をたれていました。それは仲良しの鬼の子でした。

「たいへんなことになってるよ、知ってる？」

「何がたいへんなの？」

「昨日の晩、庄屋様の米蔵に泥棒が入ってお米を盗んだんだ。朝、庄屋様が起きてみると、お庭に大きな鬼の足跡が残ってたんだって。そこで村の男たちみんなで鬼を懲らしめることにしたんだ。今日の夜、村の入り口にみんなで集まって、棒を使って懲らしめるんだって。知ってた？」

「初めて聞いた。たいへんなことになっちゃったね。実はそれは子どもが病気の黒鬼がやったのだと思う」

「どうして？」

「黒鬼の子どもは随分前から病気なんだ。そして最近とても寒いだろ。とうとう熱が高くなって死にそうなんだ。お医者様は栄養のあるものを食べさせないと本当に死んでしまうといったんだ。そして一番栄養のあるお米を食べさせなさいといったんだって。でももう鬼の山には一粒のお米も残っていない。そこで黒鬼は庄屋様のお米を盗んだんだよ、きっと」

「じゃあ、子どもを助けるためにやったの？」

「そうだと思うよ。だって黒鬼はいつも優しく、決まりをよく守るいい鬼なんだから」

男の子はおばあちゃんの家へ走って帰りました。そしておばあちゃんに鬼の子どもから聞いた話をしました。おばあちゃんは、少しの間何かを考えているようでしたが、ふっと明るい顔になり

「今夜、お前も一緒におばあちゃんと村の入り口に行くんだよ」

といいました。男の子はどうなるのか不安でたまりません。そして自分の子どものためにお米を盗んだ黒鬼

と遊んだことを思い出しました。あの頃、黒鬼の子どもはまだ元気で、一緒に相撲をとって遊んでいました。そして優しい黒鬼は男の子にわざと負けてくれたりしました。そんな優しい黒鬼が泥棒をするなんて、よほどのことがあったに違いありません。そんな黒鬼を懲らしめるなんてかわいそうだと思います。でも、泥棒をしたのは間違いありません。それは悪いことなんです。困っているなら声をかけてくれたらよかったです。そしていつものように日が暮れて、いつものように薄い重湯と豆を食べて、お父さんに見つからないようにおばあちゃんの家に行きました。そして辺りが真っ暗になって頃、おばあちゃんと男の子はなにやら包みを持って家を出て行きました。

さて村の入り口です。庄屋様が誰が何処に隠れるかを説明しています。

「ええな、みんな、鬼が来て村の入り口に入ったときにわしが声をかける。その時まで静かに我慢して待っているんじゃ。寒かろうがじっとしておるのじゃぞ」

そしてゆっくりと時間が経っていきました。その間におばあちゃんも男の子も村の入り口近くにじっと身を潜めていました。体が冷たく冷えていきます。吐く息は真っ白です。手もかじかんできました。と、その時、山のほうから足音が聞こえてきました。力強く、大きな歩幅の足音です。黒鬼のものに違いありません。村の人たちも今度は手に汗を握っています。そして庄屋様が声をかけようとしたその時、おばあちゃんと男の子がいきなり黒鬼に向かって何かを投げつけ始めました。黒鬼は闇の中から飛んでくる小さな石のようなものを散々ぶつけられました。「痛い痛い」といいながら逃げようとして、ふっ足元を見ました。するとなにや白い小さな粒が落ちていました。一粒を拾い上げてみると、それは固い白い豆でした。おばあちゃんと男の子は黒鬼に向かって豆をたくさんまいていたのです。黒鬼は立ち止まると、米を盗むために持ってきたざるの中に白い豆を集め始めました。豆はあっという間にざる一杯になりました。黒鬼は何度も何度もおばあちゃんと男の子に頭を下げて山に逃げて行きました。

「なんで黒鬼に豆をぶつけた？わし達は小石だと思ってみていたら、あれは豆でないかい？」

庄屋様がおばあちゃんに尋ねました。するとおばあちゃんは男の子に代わって黒鬼の子どもの話をしました。

「そんなことがあったか。う～ん、だったらそうだとはいえなんとかしてやったのに。じゃがお前達二人はええことをしてやった。明日の晩も見に来よう。そして黒鬼が来たら、豆を撒いてやろう」。

庄屋様も黒鬼のことをよくわかってくれました。次の晩、黒鬼がまたやってきました。そして村の入り口に立つと直ぐに村の人たちに捕まりました。黒鬼はお米を盗んだことを謝りました。そしてやっぱり懲らしめられるのかなと思ったときです。それまでおっかない顔をしていた村の人たちは次々に袋に入った豆を取り出し、それを黒鬼に渡しました。

「米を盗んだことは悪いことじゃ、だがな、困ったときはお互い様じゃ、さあ、この豆をたっぷり食べさせて子どもの病気を治してやれ。」

「もういくつも残ってないが、うちにあった餅じゃ、これも食べさせてやれ。」

と、黒鬼の両手に持ちきれないほどの豆や餅が集まりました。山へ帰っていく黒鬼はゴシゴシと涙を拭きながら、何度も何度も頭を下げて行きました。

それから、毎年2月の寒い日になると、村の人たちは村の外に向かって豆を撒くようになりました。今でもその村だけは節分の日に鬼を退治するのではなく、鬼たちを助けてあげるために豆を撒いているそうです。

《つづく》